

をこらへて、まづ庭をはかば、或は一飯にありつく事あるべし。是己を捨てて人に随ふの道にして、百事行はれ難き時に立至るも行はるべきなり。我若年初めて家を持ちし時、一枚の鋤損じたり。隣家に行きて鋤をかし呉れよといふ。隣翁曰く、今此畑を耕し菜を蒔かんとする處なり。蒔終らざれば貸し難しといへり。我家に販るも別に爲すべき業なし、予此畑を耕して進ずべしと云ひて耕し、菜の種を出されよ、序に蒔きて進ぜんと云ひて、耕し且つ蒔きて、後に鋤をかりし事あり。隣翁曰く、鋤に限らず何にても差支の事あらば遠慮なく申されよ。必ず用達つべしといへる事ありき。斯の如くすれば百事差支なきものなり。汝國に販り、新たに一家を持たば、必ず此心得あるべし。夫れ汝未だ壯年なり。終夜いねざるも障りなかるべし。夜々寝る暇を勵まし、勤めて、草鞋一足、或は二足を作り、明日開拓場に持出し、草鞋の切れ破れたる者に與へんに、受くる人禮せずといへども、元寝る暇にて

作りたるなれば其分なり。禮を云ふ人あれば、夫れ丈の徳なり。又一錢半錢を以て應ずる者あれば、是又夫れ丈の益なり。能く此理を感銘し、連日おこたらずば、何ぞ志の貫かざる理あらんや。何事か成らざるの理あらんや。われ幼少の時の勤、此外にあらず。肝に銘じて忘るべからず。又損料を出して、差支の物品を用辨するを甚だ損なりと云ふ人あれど、しからず。夫れは事足る人の事なり。新たに一家を持つ時は百事差支あり、皆損料にて用辨すべし。世に損料ほど辨理なるものはなし。且つ安き物はなし。決して損料を高く物損なるものと思ふことなかれ。

年若きもの數名居れり。翁諭して曰く、世の中の人を見よ。一錢の柿を買ふにも、二錢の梨子を買ふにも、眞頭の眞直なる瑕のなきを選びて取るにあらずや。又茶碗を一つ買ふにも、色の好き形の宜しきを選び撫でて見、鳴



長く此志を繼ぐべし。若し相背くに於いては、我子孫にあらず。民は之れ國の本なればなりとあり。然れば其許が遺言すべき所は、我過つて新金銀引替御用を勤め、自然増長して驕奢に流れ、御用の種金を遣ひ込み大借に陥り、身代破滅に及ぶべき處、報徳の方法に因つて莫大の恩惠を受け、此の如く安穩に相續する事を得たり。此報恩には、子孫代々驕奢安逸を嚴に禁じ、節儉を盡し、身代の半を推譲り、世益を心掛け、貧を救ひ、村里を富す事を勤むべし。若し此遺言に背く者は、子孫たりと雖も子孫にあらざる故、速に放逐すべし。婢嫁は速に離縁すべし。我家株田畑は本來報徳方法の物なればなりと子孫に遺言せば、神君の思召と同一にして、孝なり、忠なり、仁なり、義なり。其子孫徳川氏の二代公三代公の如くその遺言を守らば、其功業量るべからず。汝が家の繁昌長久も限りあるべからず。能々思考せよ。

翁曰く、農にても商にても、富家の子弟は業として勤むべき事なし。貧家の者は活計の爲に勤めざるを得ず。且つ富を願ふが故に自ら勉強す。富家の子弟は、譬へば山の絶頂に居るが如く、登るべき處なく、前後左右皆眼下なり。是に依つて分外の願を起し、士の眞似をし、大名の眞似をし、増長に増長して、遂に滅亡す。天下の富者皆然り。爰に長く富貴を維持し、富貴を保つべきは、只我道推譲の教へあるのみ。富家の子弟、此推譲の道を踏まざれば、千百萬の金ありといへども、馬糞茸と何ぞ異らん。夫れ馬糞茸は季候に依つて生じ、幾程もなく腐廢し、世上の用にならず、只徒に生じて徒に滅するのみ。世の富家と呼ばるる者にして斯の如くなる、豈惜しき事ならずや。

翁曰く、百事決定と注意とを肝要とす。如何となれば、何事によらず百事決定と注意とによりて事はなる物なり。小事たりといへども、決定する事



らして音を聞き、選りに選りてとるなり。世人皆然り。柿や梨子は買ふといへども、悪しくば捨てて可なり。夫れさへも此の如し。然れば人に選まれて、驛となり嫁となる者、或は仕官して立身を願ふ者、己が身に瑕ありては、人の取らぬは勿論の事、その瑕多き身を以て、上に得られねば、上に眼のないなど上を悪くいひ、人を咎むるは大なる間違ひなり。自らかへり見よ。必ずおのが身に瑕ある故なるべし。夫れ人身の瑕とは何ぞ。譬へば酒が好きだとか、酒の上が悪いとか、放蕩だとか、勝負事が好きだとか、情弱だとか、學藝だとか、何か一つ二つの瑕あるべし。買手のなき勿論なり。是を柿梨子に譬ふれば、眞頭が曲りて濫さうに見ゆるに同じ。されば人の買はぬも無理ならず、能く勘考すべきなり。古語に、内に誠あれば必ず外に顯はるとあり。瑕なくして眞頭の眞直なる柿の賣れぬと云ふ事あるべからず。夫れ何程草深き中にも薯蕷があれば、人が直に見付けて捨ててはおかず。又泥深

き水中に潜伏する鰻鱈も、必ず人の見付けて捕へる世の中なり。されば内に誠有りて外にあらはれぬ道理あるべからず。此道理を能く心得、身に瑕のなき様に心がくべし。

翁曰く、山芋掘りは、山芋の蔓を見て芋の善悪を知り、鰻つりは、泥土の様子を見て鰻の居る居らざるを知り、良農は草の色を見て土の肥瘠を知る。みな同じ。所謂至誠神の如しと云ふものにして、永年刻苦経験して發明するものなり。技藝に此事多し。悔るべからず。

翁多田某に謂うて曰く、我東照神君の御遺訓と云ふ物を見しに、曰く、我敵國に生れて只父祖の仇を報ぜん事の願ひのみなりき。祐譽が教へに依つて、國を安んじ民を救ふの天理なる事を知りてより、今日に至れり。子孫



長く此志を繼ぐべし。若し相背くに於いては、我子孫にあらず。民は之れ國の本なればなりとあり。然れば其許が遺言すべき所は、我過つて新金銀引替御用を勤め、自然増長して驕奢に流れ、御用の種金を遣ひ込み大借に陥り、身代破滅に及ぶべき處、報徳の方法に因つて莫大の恩惠を受け、此の如く安穩に相續する事を得たり。此報恩には、子孫代々驕奢安逸を嚴に禁じ、節儉を盡し、身代の半を推譲り、世益を心掛け、貧を救ひ、村里を富す事を勤むべし。若し此遺言に背く者は、子孫たりと雖も子孫にあらざる故、速に放逐すべし。婢嫁は速に離縁すべし。我家株田畑は本來報徳方法の物なればなりと子孫に遺言せば、神君の思召と同一にして、孝なり、忠なり、仁なり、義なり。其子孫徳川氏の二代公三代公の如くその遺言を守らば、其功業量るべからず。汝が家の繁昌長久も限りあるべからず。能々思考せよ。

翁曰く、農にても商にても、富家の子弟は業として勤むべき事なし。貧家の者は活計の爲に勤めざるを得ず。且つ富を願ふが故に自ら勉強す。富家の子弟は、譬へば山の絶頂に居るが如く、登るべき處なく、前後左右皆眼下なり。是に依つて分外の願を起し、士の眞似をし、大名の眞似をし、増長に増長して、遂に滅亡す。天下の富者皆然り。爰に長く富貴を維持し、富貴を保つべきは、只我道推譲の教へあるのみ。富家の子弟、此推譲の道を踏まざれば、千百萬の金ありといへども、馬糞茸と何ぞ異らん。夫れ馬糞茸は季候に依つて生じ、幾程もなく腐廢し、世上の用にならず、只徒に生じて徒に滅するのみ。世の富家と呼ばるる者にして斯の如くなる、豈惜しき事ならずや。

翁曰く、百事決定と注意とを肝要とす。如何となれば、何事によらず百事決定と注意とによりて事はなる物なり。小事たりといへども、決定する事



なく注意する事なければ、百事悉く破る。夫れ一年は十二ヶ月也。然して月に米實法るにあらず、只初冬一ヶ月のみ米實法りて、十二月米を喰ふは、人々しか決定してしか注意するによる。之によりて之を見れば二年に一度三年に一度實法るとも、人々其通り決定して注意せば、決して差支あるべからず。凡そ物の不足は、皆覺悟せざる處より出づるなり。されば、人々平日の暮し方、大凡此位の事にすれば、年末に至つて餘るべしとか、不足すべしとか、しれざる事はなかるべし。之に心付かず、うかうかと暮して大晦日に至り始めて驚くは、愚の至り、不注意の極みなり。ある飯焚女が曰く、一日に一度づつ米櫃の米をかき均して見る時は、米の俄に不足すると云ふ事決してなしといへり。これ飯焚女のよき注意なり。此米櫃をならして見るは、則ち一家の店卸しにおなじ。能々決定して注意すべし。

翁曰く、善惡の論甚だむづかし。本來を論ずれば、善も無し惡もなし。善と云うて分つ故に惡と云ふ物出來るなり。元人身の私より成れる物にて、人道上の物なり。故に人なければ善惡なし。人あつて後に善惡はある也。故に人は荒蕪を開くを善とし、田畑を荒すを惡となせども、猪鹿の方にては、開拓を惡とし荒すを善とするなるべし。世法盜人を惡とすれども、盜人仲間にては盜を善とし、之を制する者を惡とするならん。然れば如何なる物是善ぞ、如何なる物是惡ぞ。此理明辨し難し。此理の尤も見安きは遠近なり。遠近と云ふも、善惡と云ふも理は同じ。譬へば杭二本を作り、一本には遠と記し、一本には近と記し、此二本を渡して、此杭を汝が身より遠き所と近き所と二所に立つべしと云付ける時は、速に分る也。予が歌に、見渡せば遠き近きはなかりけりおのれおのれが住處にぞあると。此歌善きもあしきもなかりけりといふ時は、人身に切なる故に分らず、遠近は人身に切ならざる



故に分る也。工事に曲直を望むも、餘り目に近過ぎる時は見えぬ物也。さりとて遠過ぎても亦眼力及ばぬ物なり。古語に、遠山木なし、遠海波なし、といへるが如し。故に我身に疎き遠近に移して論す也。夫れ遠近は、己が居所先づ定まつて後に遠近ある也。居處定まらざれば遠近必ずなし。大阪遠しと云はば關東の人なるべし。關東遠しと云はば上方の人なるべし。禍福吉凶是非得失皆是に同じ。禍福も一つなり。善惡も一つなり。得失も一つなり。元一つなる物の半を善とすれば、其半は必ず惡也。然るに其半に惡なからん事を願ふ。是成難き事を願ふ也。夫れ人生れたるを喜べば、死の悲みは隨つて離れず。咲たる花の必ず散るに同じ。生じたる草の必ず枯るるに同じ。涅槃經に此譬あり、或人の家に容貌美麗端正なる婦人入り來る。主人如何なる御人ぞと問ふ。婦人答へて曰く、我は功德天なり。我至る所、吉祥福德無量なり。主人悦んで請じ入る。婦人曰く、我に隨從の婦一人あり、必ず跡より來

る。是をも請ずべしと。主人諾す。時に一女來る。容貌醜陋にして至つて見惡し。如何なる人ぞと問ふ。此女答へて曰く、我は黑闇天なり。我至る處不祥災害ある無限なりと。主人是を聞き、大に怒り、速に歸り去れといへば、此女曰く、前に來れる功德天は我姉なり。暫くも離るる事あたはず。姉を止めば我をも止めよ。我をいさば姉をも出せ、と云ふ。主人暫く考へて、二人ともに出しやりければ、二人連れ立つて出行きけりと云ふ事ありと聞けり。是生者必滅會者定離の譬なり。死生は勿論、禍福吉凶、損益得失、皆同じ。元禍と福と同躰にして一圓なり。吉と凶と兄弟にして一圓也。百事皆同じ。只今も其通り、通勤する時は、近くてよいといひ、火事だと云ふと、遠くてよかりしと云ふ也。是を以てしるべし。

禍福二つあるにあらず、元來一つなり。近く譬ふれば、庖丁を以て茄子を



切り、大根を切る時は福なり、若し指を切る時は禍なり。只柄を持つて物を切ると、誤つて指を切るとの違のみ。夫れ柄のみありて又無ければ庖丁にあらず。又ありて柄無ければ又用をなさず。柄あり又ありて庖丁なり。柄あり又あるは庖丁の常なり。然して指を切る時は禍とし、菜を切る時は福とす。されば禍福と云ふも、私物にあらずや。水もまた然り。畔を立てて引けば田地を肥して福なり。畔なくして引くときは、肥土流れて田地やせ、其禍たるや云ふべからず。只畔有ると畔なきとの違のみ。元同一水にして、畔あれば福となり、畔なければ禍となる。富は人の欲する處なり。然りといへども、己が爲にするときには禍是に隨ひ、世の爲にすることは福是に隨ふ。財寶も亦然り。積んで散ずれば福となり、積んで散ぜざれば禍となる。是人々知らずんばあるべからざる道理なり。

翁曰く、何事にも變通といふ事あり、しらずんばあるべからず。則ち權道なり。夫れ難きを先にするは、聖人の教なれども、是は先づ仕事をして、而して後に賃金を取れと云ふが如き教なり。爰に農家病人等ありて、耕耘手後れなどの時、草多き處を先にするは世上の常なれど、右様の時に限りて、草少く至つて手易き畑より手入れして、至つて草多き處は最後にすべし。是尤も大切の事なり。至つて草多く手重の處を先にする時は、大に手間取れ、其間に草少き畑も皆一面草になりて、何れも手後れになる物なれば、草多く手重き畑は、五畝や八畝は荒すとも儘よと覺悟して暫く捨置き、草少く手輕なる處より片付くべし。しかせずして手重き處に掛り、時日を費す時は、僅の畝歩の爲に總躰の田畑順々手入れ後れて大なる損となるなり。國家を興復するも又此理なり。しらずんばあるべからず。又山林を開拓するに、大なる木の根は其儘差置きて、廻りを切り開くべし。而して三四年を経



れば、木の根自ら朽ちて、力を入れずして取るるなり。是を開拓の時、一時に掘取らんとする時は、勞して功少し。百事その如し。村里を興復せんとすれば、必ず抗する者あり、是を處する又此理なり。決してかかはるべからず。障るべからず。度外に置きてわが勤を勵むべし。

翁曰く、今日は則ち冬至なり。夜の長き則ち天命なり。夜の長きを憂ひて短くせんと欲すとも、如何ともすべなし。是を天と云ふ。而して行燈の皿に、油の一杯ある、是も又天命なり。此一皿の油、此夜の長きを照らすにたらず。是又如何ともすべからず。共に天命なれども、人事を以て燈心を細くする時は、夜半にして消ゆべき燈も曉に達すべし。是人事の盡さざるべからざる所以なり。譬へば伊勢詣りする者、東京より伊勢までまづ百里として、路用拾圓なれば、上下廿日として、一日五十錢に當る。是則ち天命なり。然るを

一日に六十錢づつ遣ふ時は二圓の不足を生ず。之を四十錢づつ遣ふ時は貳圓の有餘を生ず。是人事を以て天命を伸縮すべき道理の譬也。夫れ此世界は自轉運動の世界なれば、決して一所に止まらず。人事の勤惰に仍つて天命も伸縮すべし。たとへば今朝焚くべき薪なきは、是天命なれども、明朝取り來れば則ちあり。今水桶に水の無きも、則ち差當つて天命なり。されども汲來れば則ちあり。百事此道理なり。

翁、常陸國青木村のために力を盡されし事は、予が兄大澤勇助が烏山藩の菅谷某と謀りて起草し、小田某に托して漢文にせし青木村興復記事の通りなれば、今贅せず。扱年を経て、翁其近村灰塚村の興復方法を扱はれし時、青木村、舊年の報恩の爲にとて、冥加人足と唱へ、毎戸一人づつ無賃にて勤む。翁是を検して後に曰く、今日來り勤むる處の人夫、過半二三男の輩に



して、我往年厚く撫育せし者にあらず。是表に報恩の道を飭るといへども、内情如何を知るべからず。されば我此冥加人足を出せしを悦ばずと。青木村地頭の用人某是を聞きて、我能く説諭せんと云ふ。翁是を止めて曰く、是道にあらず。縦令内情如何にありとも、彼の舊恩を報いん爲とて無賃にて數十人の人夫を出せり。内情の如何を置いて稱せずばあるべからず。且つ薄きに應ずるには厚きを以てすべし。是則ち道なりとて、人夫を招き、舊恩の冥加として遠路出て來り、無賃にて我業を助くる、其奇特を懇々賞し、且つ謝し、過分の賃銀を投與して、歸村を命ぜらる。一日を隔てて、村民老若を分たず皆未明より出て來て、終日休せずして働き、賃錢を辭して去る。翁又金若干を贈られたり。

翁曰く、一言を聞きても人の勤惰は分る者なり。東京は水さへ錢が出る

と云ふは懶惰者なり。水を賣つても錢が取れるといふは勉強人なり。夜は未だ九時なるに、十時だと云ふ者は寐たがる奴なり。未だ九時前なりと云ふは勉強心のある奴なり。すべての事、下に目を付け下に比較する者は、必ず下り向きの懶惰者なり。たとへば碁を打つて遊ぶは酒を飲むよりよろし、酒を呑むは博奕よりよろしと云ふが如し。上に目を付け上に比較する者は、必ず上り向きなり。古語に、一言以て知とし、一言以て不知とす、とあり。うべなるかな。

翁曰く、聖人も聖人にならむとて聖人になりたるにはあらず。日々夜々天理に随ひ人道を盡して行ふを、他より稱して聖人といひしなり。堯舜も一心不亂に親に仕へ人を隣み、國の爲に盡せしのみ。然るを他より其徳を稱して聖人といへるなり。諺に、聖人々々といふは誰が事と思ひしに、おら



が隣の丘が事かといへる事あり。誠にさる事なり。我昔鳩ヶ谷驛を過ぎし時、同驛にて不士講に名高き三志と云ふ者あれば尋ねしに、三志といひては誰もしるものなし。能々問ひ尋ねしかば、夫れは横町の手習師匠の庄兵衛が事なるべし、といひし事ありき。是におなじ。

下館侯の寶藏火災ありて、重寶天國の劍焼けたり。官吏城下の富商中村某に謂うて曰く、斯の如く焼けたりといへども、當家第一の寶物なり、能く研ぎて白鞘にし、藏に納め置かんと評議せり、如何。中村某焼けたる劍を見て曰く、尤もの論なれども無益なり。假令此劍焼けずとも、此の如く細し。何の用にか立たん。然る上に此の如く焼けたるを、今研ぎて何の用にかせん。此儘にて仕舞ひ置くべしと云へり。翁聲を勵まして曰く、汝大家の子孫に産れ、祖先の餘光に因りて格式を賜はり、人の上に立ちて人に敬せらるる

汝にして、右様の事を申すは大なる過なり。汝が人に敬せらるるは太平の恩澤なり。今は太平なり、何ぞ劍の用に立つと立たざるを論ずる時ならんや。夫れ汝自らかへりみよ。汝が身用に立つ者と思ふか、汝はこの天國の燒劍と同じく、實は用に立つ者にあらず。只先祖の積徳と家柄と格式とに仍つて用立つ者の如くに見え、人にも敬せらるるなり。燒身にても細身にても重寶と尊とむは、太平の恩澤、此劍の幸福なり。汝を中村氏と人々敬するは、是又太平の恩澤と先祖の餘蔭なり。用立つ用立たざるを論ぜば、汝が如きは捨てて可なり。假令用立たずとも、當家御先祖の重寶、古代の遺物、是を大切にするは、太平の今日至當の理なり。我は此劍の爲に云ふにあらず、汝がために云ふなり。能々沈思せよ。往時水府公、寺社の梵鐘を取上げて、大砲に鑄替へ玉ひし事あり。予此時にも御處置惡しきにはあらねども、未だ太平なれば甚だ早し。太平には鐘や手水鉢を鑄て、社寺に納めて、太平を祈ら



すべし。事あらば速に取つて大砲となす。誰か異議を云はん。社寺ともに悦んで捧ぐべし。斯くして國は保つべきなり。若し敵を見て大砲を造る。所謂盗人を捕へて繩を索ふが如しと云はんか。然りといへども、尋常の敵を防ぐべき備へは、今日足れり。其敵の容易ならざるを見て、我領内の鐘を取つて大砲に鑄る。何ぞ遅からんや。此時日もなき程ならば、大砲ありといへども、必ず防ぐ事あたはざるべし、と云ひし事ありき。何ぞ太平の時に亂世の如き論を出さんや。斯の如く用立たざる焼身をも寶とす。况や用立つべき劍に於てをや。然らば自然宜敷き劍も出來たらん。されば能く研ぎあげて、白鞘にして元の如く服紗に包み、二重の箱に納めて重寶とすべし。是汝に帶刀を許し格式を與ふるに同じ。能々心得べしと。中村某叩頭して謝す。時九月なり。翌朝中村氏發句を作りて或人に示す。其句、じりじりと照りつけられて實法る秋とある。人は是を翁に呈す。翁見て悦喜限りなし。曰く、我昨夜

中村を教戒す。定めて不快の念あらんか。怒氣内心に満たんか。と、ひそかに案じたり。然れども家柄と大家とに懼れおもねる者のみなれば、しらずしらず増長して、終に家を保つ事覺束なしと思ひたれば、止むを得ず嚴に教戒せるなり。然るに怒氣を貯へず、不快の念もなく、虚心平氣に此句を作る。其器量案外にして、大度見えたり。此家の主人たるに恥ぢず。此家の維持疑ひなし。古語に、我を非として當る者は我師也とあり。且つ大禹は善言を拜すともあり。汝等も肝銘せよ。夫れ富家の主人は、何を言つても、御尤も御尤もと鑄付者のみにて、礪に出合ひて研ぎ磨かるる事なき故、慢心生ずるなり。譬へば爰に正宗の刀ありといへども、研ぐ事なく磨く事なく、鑄付物とのみ一處におかば、忽ち腐れて、紙も切れざるに至るべし。其如く、三味線引や、大鼓持などとのみ交りあて、夫れも御尤も、是も御尤も、とこび諂ふを悦んで明し暮し、爭友一人のなきは、豈あやふからざらんや。



翁、高野某を諭して曰く、物各命あり、數あり、猛火の近づくべからざるも、薪盡くれば火は随つてきゆるなり。矢玉の勢、あたる處必ず破り必ず殺すも、弓勢つき薬力盡くれば、叢の間に落ちて人に拾はるるにいたる。人も其の如し。おのれが勢、世に行はるるとも、己が力と思ふべからず。親先祖より傳へ受けたる位祿の力と、拜命したる官職の威光とによるが故なり。夫れ先祖傳來の位祿の力か官職の威光がなければ、いかなる人も、弓勢の盡きたる矢、薬力の盡きたる鐵砲玉に異ならず。草間に落ちて人に愚弄さるるに至るべし。思はずばあるべからず。

同氏は、相馬領内衆に抽んで仕法發業を懇願せし人なり。仍つて同氏預りの成田坪田二村に開業なり、仕法を行ふ僅に一年にして、分度外の米

四百拾俵を産出せり。同氏藏を建てて收め貯へ、凶歲の備へにせんとす。翁曰く、村里の興復を謀る者は、米金を藏に收むるを尊まず。此米金を村里の爲に遣ひ拂ふを以て専務とするなり。此遣ひ方の巧拙に依つて、興復に遅速を生ず。尤も大切なり。凶荒豫備は、仕法成就の時の事なり、今卿が預りの村里の仕法、昨年の發業なり。是より一村興復、永世安穩の規模を立つべきなり。先づ是こそ此村に取つて急務の事業なれと云ふ事を能々協議して、開拓なり、道路橋梁なり、窮民撫育なり、尤も務むべきの急を先にし、又村里のために利益多き事に着手し、害ある事を除くの方法に遣ひ拂ふべし。急務の事皆すまば、山林を仕立つるもよろし。土性轉換もよろし。非常飢疫の豫備尤もよろし。卿等能々思考すべし。

某氏事をなして過ぐるの癖あり。翁諭して曰く、凡そ物毎に度と云ふ事



あり飯を炊くも料理をするも、皆宜しき程こそ肝要なれ。我方法も又同じ。世話をやかねば行はれざるは勿論なれども、世話もやき過ぎると、又人に厭はれ、如何にして宜しきや分らず。先づ捨ておくべしなどと云ふに至るものなり。古人の句に、さき過ぎて是さへいやし梅の花、とあり。云ひ得て妙なり。百事過ぎたるは及ばざるにおとれり。心得べき事なり。

浦賀の人飯高六藏、多辯の癖あり。暇を乞うて國に歸らんとす。翁諭して云ふ、汝國に歸らば決して人に説く事を止めよ。人に説く事を止めて、おのれが心にて己が心に異見せよ。己が心にて己が心に異見するは、柯を取つて柯を伐るよりも近し。元己が心なればなり。夫れ異見する心は、汝が道心なり。異見せらるる心は、汝が人心なり。寝ても覺めても坐しても歩行ても離るる事なき故、行住坐臥油断なく異見すべし。若し己酒を好まば、多く飲

む事を止めよと異見すべし。速に止めばよし、止めざる時は幾度も異見せよ。其外驕奢の念起る時も、安逸の慾起る時も皆同じ。百事此の如くみづから戒めば、是無上の工夫なり。此工夫を積んで、己が身修り家齊ひなば、是己が心、己が心の異見の聞きしなり。此時に至らば、人汝が説を聞くものあるべし。己修つて人に及ぶが故なり。己が心にて己が心を戒め、己が聞かざれば必ず人に説く事なかれ。且つ汝家に歸らば、商法に従事するならん。土地柄といひ累代の家業といひ至當なり。去ながら汝賣買をなす事も、必ず金を儲けんなどと思ふべからず。只商道の本意を勤めよ。商人たるもの商道の本意を忘るる時は、眼前は利を得るとも、詰り滅亡を招くべし。能々商道の本意を守りて勉強せば、財寶は求めずして集り、富榮繁昌量るべからず。必ず忘るる事なかれ。



嘉永五年正月、翁おのが家の温泉に入浴せらるる事數日、予が兄大澤精一、翁に隨ひて入浴す。翁湯桁にゐまして論して曰く、夫れ世の中、汝等が如き富者にして、皆足る事を知らず、飽くまでも利を貪り、不足を唱ふるは、人のこの湯船の中に立ちて、屈まずして湯を肩に掛けて、湯船はなほだ淺し、膝にだも満たずと罵るが如し。若し湯をして望に任せば、小人童子の如きは入浴する事能はざるべし。是湯船の淺きにあらずして、汝が屈まざるの過なり。能く此過を知りて、屈まば、湯忽ち肩に滿ちて、おのづから十分ならん。何ぞ他に求むる事をせん。世間富者の不足を唱ふる何ぞ是に異らん。夫れ分限を守らざれば、千萬石といへども不足なり。一度過分の誤を悟つて分度を守らば、有餘おのづから有りて、人を救ふに餘りあらん。夫れ湯船は大人は屈んで肩につき、小人は立つて肩につくを中庸とす。百石の者は五十石に屈んで、五十石の有餘を譲り、千石の者は五百石に屈んで、五百石

の有餘を譲る。是を中庸と云ふべし。若し一郷の内一人此道を踏む者あらば、人々皆分を越ゆるの誤りを悟らん。人々皆誤りを悟り、分度を守りて克く譲らば、一郷富榮にして、和順ならん事疑ひなし。古語に、一家仁なれば、一國仁に興るといへり。能く思ふべき事なり。夫れ仁は人道の極なり。儒者の説甚だむづかしくて用をなさず。近く譬ふれば此湯船の湯の如し。是を手にて己が方に搔けば、湯我方に來るが如くなれども、皆向うの方へ流れ歸るなり。是を向うの方へ押す時は、湯向うの方へ行くが如くなれども、又我方へ流れ歸る。少く押せば少く歸り、強く押せば強く歸る。是天理なり。夫れ仁と云ひ義と云ふは、向うへ押す時の名なり。我方へ搔く時は不仁となり、不義となる。慎まざるべけんや。古語に、己に克つて禮に復れば、天下仁に歸す。仁をなす己による、人によらんやとあり。己とは手の我方へ向く時の名なり。禮とは我手を先の方に向くる時の名なり。我方へ向けては、仁を説く



も義を演ぶるも皆無益なり。能く思ふべし。夫れ人跡の組立を見よ。人の手は我方へ向きて我爲に便利に出来たれども、又向うの方へも向き、向うへ押すべく出来たり。是人道の元なり。鳥獸の手は是に反して、只我方へ向きて我に便利なるのみ。されば人たる者は、他の爲に押すの道あり。然るを我身の方に手を向け、我爲に取る事のみを勤めて、先の方に手を向けて、他の爲に押す事を忘るるは、人にして人にあらず、則ち禽獸なり。豈耻かしからざらんや。只耻かしきのみならず、天理に違ふが故に終に滅亡す。故に我常に、奪ふに益なく、讓るに益あり、讓るに益あり、奪ふに益なし、是則ち天理なりと教ふ。能々玩味すべし。

### 陸海軍人に賜はりたる勅諭

我國の軍隊は世々天皇の統率し給ふ所にそある昔神武天皇躬つから大伴物部の兵ともを率ゐ中國のまつろはぬものともを討ち平け給ひ高御座に即かせられて天下しろしめし給ひしより二千五百有餘年を経ぬ此間世の様の移り換るに隨ひて兵制の沿革も亦屢なりき古は天皇躬つから軍隊を率ゐ給ふ御制にて時ありては皇后皇太子の代らせ給ふこともありつれと大凡兵權を臣下に委ね給ふことはなかりき中世に至りて文武の制度皆唐國風に倣はせ給ひ六衛府を置き左右馬寮を建て防人など設けられしかは兵制は整ひたれとも打續ける昇平に狃れて朝廷の政務も漸文弱に流れければ兵農おのつから二に分れ古の徴兵はいつとなく



壯兵の姿に變り遂に武士となり兵馬の權は一向に其武士とも棟梁たる者に歸し世の亂と共に政治の大權も亦其手に落ち凡七百年の間武家の政治とはなりぬ世の様の移り換りて斯なれるは人力もて挽回すへきにあらずとはいひなから且は我國體に戻り且は我祖宗の御制に背き奉り淺間しき次第なりき降りて弘化嘉永の頃より徳川の幕府其政衰へ剩外國の事とも起りて其侮をも受けぬへき勢に迫りければ朕か皇祖仁孝天皇考孝明天皇いたく宸襟を惱し給ひしこそ忝くも又惶けれ然るに朕幼くして天津日嗣を受けし初征夷大將軍其政權を返上し大名小名其版籍を奉還し年を経すして海内一統の世となり古の制度に復しぬ是文武の忠臣良弼ありて朕を輔翼せる功績なり歷世祖宗の專蒼生を憐み給ひし御遺澤なりといへとも併我臣民の其心に順逆の理を辨へ大義の重きを知れるか故にこそあれされは此時に於て兵制を更め我國の光を耀

さんと思ひ此十五年か程に陸海軍の制をは今の様に建定めぬ夫兵馬の大權は朕か統ふる所なれば其司々をこそ臣下には任すなれ其大綱は朕親之を攬り肯て臣下に委ぬへきものにあらず子々孫々に至るまで篤く斯旨を傳へ天子は文武の大權を掌握するの義を存して再中世以降の如き失體なからんことを望むなり朕は汝等軍人の大元帥なるそされは朕は汝等を股肱と頼み汝等は朕を頭首と仰きてそ其親は特に深かるへき朕か國家を保護して上天の恵に應し祖宗の恩に報いまゐらする事を得るも得さるも汝等軍人か其職を盡すと盡ささるとに由るそかし我國の稜威振はさることあらは汝等能く朕と其憂を共にせよ我武維揚りて其榮を耀さは朕汝等と其譽を偕にすへし汝等皆其職を守り朕と一心になりて力を國家の保護に盡さは我國の蒼生は永く太平の福を受け我國の威烈は大に世界の光華ともなりぬへし朕斯も深く汝等軍人に望むなれ



は猶順論すへき事こそあれいてや之を左に述べむ

一軍人は忠節を盡すを本分とすへし凡生を我國に稟くるもの誰かは國に報ゆるの心なかるへき況して軍人たらん者は此心の固からては物の用に立ち得へしとも思はれず軍人にして報國の心堅固ならざるは如何程技藝に熟し學術に長するも猶偶人にひとしかるへし其隊伍も整ひ節制も正くとも忠節を存せざる軍隊は事に臨みて烏合の衆に同かるべし抑國家を保護し國權を維持するは兵力に在れば兵力の消長は是國運の盛衰なることを辨へ世論に惑はず政治に拘らす只々一途に己か本分の忠節を守り義は山嶽よりも重く死は鴻毛よりも輕しと覺悟せよ其操を破りて不覺を取り汚名を受くるなかれ

一軍人は禮義を正くすへし凡軍人には上元帥より下一卒に至るまで其間に官職の階級ありて統屬するのみならず同列同級とても停年に新

舊あれは新任の者は舊任のものに服従すへきものそ下級のものは上官の命を承ること實は直に朕か命を承る義なりと心得よ己か隸屬する所にあらずとも上級の者は勿論停年の己より舊きものに對しては總へて敬禮を盡すへし又上級の者は下級のものに向ひ聊も輕侮驕傲の振舞あるへからず公務の爲に威嚴を主とする時は格別なれとも其外は務めて懇に取扱ひ慈愛を專一と心掛け上下一致して王事に勤勞せよ若軍人たるものにして禮儀を紊り上を敬はず下を惠ますして一致の和諧を失ひたらんには營に軍隊の蠱毒たるのみかは國家の爲にもゆるし難き罪人なるへし

一軍人は武勇を尙ふへし夫武勇は我國にては古よりいとも貴へる所なれは我國の臣民たらんもの武勇なくては叶ふまし況して軍人は戰に臨み敵に當るの職なれば片時も武勇を忘れてよかるへきかさはあれ



武勇には大勇あり小勇ありて同からず血氣にはやり粗暴の振舞なとせんは武勇とは謂ひ難し軍人たらんものは常に能く義理を辨へ能く膽力を練り思慮を殫して事を謀るへし小敵たりとも侮らず大敵たりとも懼れず己か武職を盡さむこそ誠の大勇にはあれされは武勇を尙ふものは常々人に接るには溫和を第一とし諸人の愛敬を得むと心掛けよ由なき勇を好みて猛威を振ひたらは果は世人も忌嫌ひて豺狼なとの如く思ひなむ心すへきことにこそ

一軍人は信義を重んずへし凡信義を守ること常の道にはあれとわきて軍人は信義なくては一日も隊伍の中に交りてあらんこと難かるへし信とは己か言を踐行ひ義とは己か分を盡すをいふなりされは信義を盡さむと思はは始より其事の成し得へきか得へからざるかを審に思考すへし臆氣なる事を假初に諾ひてよしなき關係を結ひ後に至りて

信義を立てんとすれば進退谷りて身の措き所に苦むことあり悔ゆとも其詮なし始に能々事の順逆を辨へ理非を考へ其言は所詮踐むへからずと知り其義はとても守るへからずと悟りなは速に止るこそよけれ古より或は小節の信義を立てんとて大綱の順逆を誤り或は公道の理非に踏迷ひて私情の信義を守りあたは英雄豪傑ともか禍に遭ひ身を滅し屍の上の汚名を後世まで遺せること其例尠からぬものを深く警めてやはあるへき

一軍人は質素を旨とすへし凡質素を旨とせされは文弱に流れ輕薄に趨り驕奢華麗の風を好み遂には貪汚に陥りて志も無下に賤くなり節操も武勇も其甲斐なく世人に爪はしきせらるる迄に至りぬへし其身生涯の不幸なりといふも中々愚なり此風一たひ軍人の間に起りては彼の傳染病の如く蔓延し士風も兵氣も頓に衰へぬへきこと明なり朕深



く之を懼れて曩に免黜條例を施行し略此事を誠め置きつれと猶も其  
 惡習の出んことを憂ひて心安からねは故に又之を訓ふるそかし汝等  
 軍人ゆめ此訓誡を等閑にな思ひそ

右の五ヶ條は軍人たらんもの暫も忽にすへからずさて之を行はむには  
 一の誠心こそ大切なれ抑此五ヶ條は我軍人の精神にして一の誠心は又  
 五ヶ條の精神なり心誠ならされは如何なる嘉言も善行も皆うはへの裝  
 飾にて何の用にかは立つへき心たに誠あれば何事も成るものそかし況  
 してや此五ヶ條は天地の公道人倫の常經なり行ひ易く守り易し汝等軍  
 人能く朕か訓に遵ひて此道を守り行ひ國に報ゆるの務を盡さは日本國  
 の蒼生舉りて之を悦ひなん朕一人の懌のみならんや

明治十五年一月四日

昭和十五年三月十五日發行  
 先哲遺言  
 定價金五拾五錢  
 信濃教育會  
 發行所 大日方利雄  
 長野市東門外一七三番地  
 信濃毎日新聞株式會社  
 長野市南區町六五七番地  
 電話 二二〇〇  
 三三〇〇  
 七九四二  
 七三〇〇



328  
251



終